

近江学園造形教育の38年—谷村太元副園長に聞く

田平 麻子・星野 志穂

滋賀県立近代美術館では、滋賀県立近江学園から管理換された陶作品43点を現在所蔵している。2017年度の管理換の際に作品についてお教えをいただいた谷村太元近江学園副園長がその年度末に定年退職されることとなり、1979年から38年間近江学園で携わられた造形教育での経験についてうかがった。

谷村 太氏（守山学園園長、元滋賀県立近江学園副園長）

聞き手：田平 麻子 書き起こし：星野 志穂

谷村太氏（以下谷村） —私がここに来ることになったきっかけは、私の高校の恩師から連絡があって、（1979年の）3月くらいだったんじゃないですかね、試験を受けたのは。元々教員になろうとしていたんですけど、今までおられた窯業科の職業指導員が定年退職されるので、その採用試験を受けないかというのがそもそものきっかけ。そのときのこの条件が、いわゆる陶芸の窯とか焼けるように調整してとか、そういうことを分かってる人というのが条件やったみたいで、それでどうやということでお声がけがあって、受けたという話ですね。ちょうど3月5日くらいだったんじゃないですかね、試験は。それで3月12日くらいにもう内定通知みたいなのが来て、ばばっという感じでしたね。そうでなければもう四国に行こうかと思ってたんで。教員で。ここは自宅からそんなに遠くないので、親も近い方がいいということで、こちらに寄せてもらったっていうのがきっかけです。

田平—先生のご出身は教員養成課程の大学ですか？

谷村—いえ京都工芸繊維大学。

田平—美術の先生を目指していらっしゃったのですか？

谷村—いいえ、化け学を取ってたので、工業化学科でしたので。

田平—恩師とおっしゃいますと？

谷村—高校の時に陶芸で一緒にさせてもらっていた先生です。今はもう定年されて、定年後はびわこ成蹊スポーツ大学にしばらくおられました。その先生もいろいろと焼き物が好きな方で。

田平—高校の頃から陶器作りをされていたのですね。失礼ですがお生まれとお育ちの場所をお聞きしてもよろしいですか？

谷村—京都府の相楽郡というところですよ。信楽の向こう側に和束町っていうお茶の街があるんですけど、そこの出身です。

田平—京都にお生まれで陶器作りとなると京焼とかになりますか？

谷村—信楽焼ですよ。山超えたら信楽なんです。あちらを抜けると京都府なんです。すぐ奈良県になりますけど、ちょうどその間だったので。今私どもの前を通ってるバスも信楽までは行ってました。今はもう行ってないですけど昔は普通に信楽行きとかありました。

田平—高校の理科の先生を目指していらっしゃったということですね。

谷村—そうなんです。まさにみんなと畑が全然違うんです。だからここに来て障害とかね、初めてでした。

田平—最初に指導員として入られた時に教える相手の方が、最初想定されていた高校生ではなくて障害のある方で、年齢的にはお近い方も多かったと思うのですが、苦勞とか経験されたこと、思われたことがありますか？

谷村—最初はびっくりしましたねやっぱり。障害というのにびっくりしたのではなく、当時は学校の先生とかも、もともと施設の中に養護学校があったりして、私が来た時には学校は移転してましたけど、まだいろいろな交流があったりしてましたのでいろんな事にびっくりというか、学校の先生が普通に来て、ちょっと泊まっていこうとかもあったり、今じゃ絶対考えられないような、通常学校なんて思ったらこういう世界もあるという感じでびっくりしました。

田平—今までご経験されていた高校との違い、施設との違いとか養護学校の違いとか、そういった中で馴染まれた部分というのは、まず最初にはやっぱりものづくりを通してということでしょうか？

谷村—ものづくりというより、一緒に遊んだかな。

田平—土を通してですか？

谷村—土というか、みんなと一緒に遊ぶ。土日も別に何かある訳ではない時は一緒に生活して遊んで慣れるところからやったかな。それと私の前任者がされてきた事を一学期間は同じようにして思ったんですけど、粘土って可塑性があって自由に好きな形になんでもなりますよね、それはもう型だけでなくていいやんみたいに変わって随分といろいろな作品を変えていったかなっていう風に思います。

田平—わりと最初の方からカリキュラム的に谷村先生の創意創案を生かされて作られたというか、活動をされることができたということですか？

谷村—そうですね、ここがそういう自由なところがあったのでね。昔ですと、例えば一回窯を焚くといくらぐらいは最低売上を出してとかいう話もあったけど、それをクリアしたらいいですよ、って話をしていて。当時は抹茶碗とか花瓶とかをろくろでひいて焼いて稼いだんですけど、もうやめて葉っぱの皿とか、葉っぱを取ってきて、主にはクズの葉っぱですけど、謄写版のローラーで写し取って皿にするとか籠とかをやりました。

田平—写し取る手法とか言うのは谷村先生のご創案ですよ。やはり高校や大学での活動の経験でしょうか。

谷村—何なんでしょうね、こうしたらできるやん、というかそんなのが多かったですね。

田平—やはり周りにこれだけ自然に囲まれてていろんな材料もあってということもあるのでしょうか。

谷村—そうですね、いろんなものがあったんでね。

田平—その自由さというのが先生方のカリキュラムにも活かされるっていうのは、近江学園の特色ですか？

谷村—造形というか自由な、それはあると思いますね。造形をやり出したのは、一回好きに作ってみるかみたいなので、当時でっかい壺を作った子がいて、自分で顔をつけたりしてやってたので面白いやんとか言って。そんなことで随分とみんなが変わったかな。ただそれをずっとやってるとどうしても飽きるんですよ。なのでできるだけ

通常の時はいろんな製品を作る、それで3年間で何を作っていくかみたいなのを作ったんです、当初は。例えば最初は箸置きでみたいな、こういうので片手を押して、そしたらそのあとは粘土の紐作って、そしたらこの紐を作って花瓶を作るとか籠を作るとかみたいなのとか。あと粘土の板で皿作るとか花瓶作るとかみたいなのを3年間ぐらいかけていろんなことをやるようにして、その合間合間に造形を入れたり、何か行事があったあとに造形を入れたりするのが、私が造形活動をやり出した最初だと思います。そうするとやっぱり変化があるんですね。外に出て行事の時の刺激があると、例えば最初粘土をちぎってこういう型押しだけをしてた子が、紐を作るとか積み上げるとか。たたらとか粘土の板同士でしたら、伸ばして付けるとかいうことを教えることで結構広がるんですよ、造形が。広がっていくし、物も大きくなったりとか、いろんな物に変わっていくというのが随分わかったんで、そりゃそう教えてないですけど、物を付けるとかそういうのはやるかな。今もだからそれは一緒かなと思います。他の施設と違うのはそこだと。ものを作るのをどうする、板を作るのはこうするとやりやすいよとか、こうやって付けとくと剥がれへんよとかっていうのを教えてあげる、そういうことは教えられます。だけどもあと造形のどこになると自分たちはどうするのかという。

田平——作り方をきっちり、基礎的な部分を教えられるというのは、やはり先生のご経験ですとか学識だと思うのですが、以前からというよりは、谷村先生からですか？

谷村——そうですね。それまでは花瓶とかそういうものしか作ってませんでしたし。籠とか葉っぱの皿とかいろんなものは私になってからですかね。だから作品が随分と変わったって言われましたね。今はそんなに珍しくないですけど当時だと籠とか珍しかったと思うんで。

田平——きっちりとした作り方のベースがもとにあって、造形の部分もあって。

谷村——だから広がるというか、だから比較的大きくって結構落ちてる子もありますけど、他の施設から比べると壊れずに付いてるかなという風に思います。それはそういう部分があったかなと思っています。

田平——余談になりますけれども、今回（2017年度）たくさん作品を管理換いただいたことでいろいろな委員の先生方に見ていただきまして、大変立派な作品で、滋賀県の陶の作品は澤田真一さん一人じゃないと、やはりこういう根元の大きな部分があったの才能だとおっしゃってくださる先生もいらっしやいまして、ありがたく思っております。近江学園での教育の特色という部分では、自由というところで谷村先生がわりときっちりとした陶芸の部分を教育されていくというところが特色でしょうか。

谷村——私だけではなく、みんなですね。他の施設にはないと思いますけどね。

田平——ものすごく大きな登り窯を作られていらっしやいますけど、あちらを作られたのは先生が入られてからですよね？

谷村——そうですね、平成元年とか2年でしょうね。

田平——ご苦労と言いますか、窯を作られるだけでも大変なご苦労だったと思うのですが、皆さんのご協力ですとかご理解ですとか、そういったところはいかがでしたか。やはり機運があったのでしょうか。

谷村——機運というより、ここは南郷からこっちに移転してきたでしょう。南郷では薪の窯があったんですよ。なので年配の先生が懐かしいといっ

て協力してくれました。なのであまり苦労はしなかったですね。やっぱり電気窯やガス窯等で焼いてると限界があるなと思ったんです。釉薬をかけて意図する色に掛けて出すわけで、子供たちはどう思ってるかもわからないので、もうありのままに任せた方がいいっていうので薪を。最近思ってるのはその辺りですね。昔はやっぱりみんなが集ってわいわいがやがややってたので、年配の先生はすごく懐かしかったみたいですね。いろんな人が来てそこで寝ながら食べながら飲みながら、みたいなのが昔の南郷の地でもあったというのでそれがここでもあるというので。

田平— 釉薬をかけられるということに関しては、釉薬をかけられた色の着いた作品であっても、かけられることによって引き立つ場合もあると思いますし、先生の選択眼も生かされるのかなと思うんですが、それはいかがですか。

谷村— 私は限られた釉薬しか使っていなかったです。3種類の組み合わせしかしてなかったので、自分で単体で買ってきて混ぜていました。微妙な色加減はできるので自分でやってました。ベースは3種類か透明を入れて4種類しか使ってなくてその組み合わせでいろんな色を出したりしてました。最近の子は結構いろんな色を使うけど、使い切れんやろとか釉薬のバケツばかり増えるやんって言ってます。こういう場合はこれをちょっと足してやるとこんな色になるんやとか。

田平— ビビッドな色を使われている先生もいらっしゃいますが、それはまた先生の個性でしょうか。

谷村— それはそれで良いのかと思います。必ずどれかの作品は釉薬は使ってたよ。薪だけではやっぱり展示をした時に微妙なアクセントとかないので。全部100%してる訳ではなく微妙には。

田平— 自然釉で釉薬が全くかかってない場合

と、釉薬がかかっている場合との見分け方の基準みたいなものはございますか。

谷村— (作品を持って) これは薪ですね、ひとつつかないように、どれだけ流れるかわからない。そんなに流れないようなところは付いてないですけど。わざとこれは溶けないのがわかってるからしてないですけど、これは童仙房という、ボンと叩いたら割れる粘土です。これは色をつけています。こういう違いがあります。こういう電気窯のものは(流れの違いが)何もなくて形が違いますね。

田平— 焼成の窯に入れる時の形というか安定のさせ方が違うということですか。

谷村— そうですね。たまたまボンと置いても流れないですよ。電気窯のだったら流れないように釉薬調整しておけばですけど、薪は分からないので、温度が上がるとたくさんかかると垂れてきます。なので使わないようにするんですね。

田平— その辺りは先生のご経験で。

谷村— そうですねしばらくすると分かります。

田平— こちらの登り窯とかを使われて、ある程度焼けるようになるのにどれぐらいかかりますか。

谷村— その時の調子にもよるといいます。調子というよりも詰め方なんですけど。火の通りをどういう風に計算するか。邪魔すると後ろが行かないとか。なので火の流れさえ見られるようになると大体綺麗に焼けるかなと思います。上がらない、いやそりゃ何かあるんだろうとか。

田平— 火の流れの調子を見られるようになるのにしばらく時間がかかりますか。

谷村——経験がいるのかなと思います。例えば薪窯だと煙突を一段プラスしてやるとちょっと引きが良くなったりとか。引きすぎると一段取るかとか。うちの窯はそれができるようにしてあるんです。中に詰めるものの大きさとかでも変わるんです。場合によっては窯をちょっと膨らまして上にプラスしたり、外してそこを足して焼いたり。自分たちで作ってますから、これを外したらこれくらいで上げたから煙突ももうちょっと積もうとかね。だいたいその辺は経験と当日見ながらで、やっぱり降ろそうとか積もうみたいなこともやりますね。

田平——先生のご指導の下に、皆様で試行錯誤されていていらっしゃるという感じになってくるんですよ。

谷村——最近は何もしてないですけどね。最後出てきたときだけ、こうすればいいと言ってます。

田平——「土と色」という展覧会にずっと携わられてきたということで、作品を発表することや展示に関してお考えになられるところをお教え頂ければと思います。

谷村——展示することで子供たちがそこに飾られているのを見るとやっぱり嬉しいし喜ぶし、ご家族とかにも見に行っておほいみたいな思いを持ったり、場合によっては新聞とかにちょっと載せていただくと、俄然がんばって制作も変わりますね。西川智之君が良い例で、彼はこういう人形を作っていたんですけど、「パイナップル」を作ったときに「八木一夫が出会った子供たち」（1993年）という滋賀県立陶芸の森でやっていただいた展覧会で、あの時にどの新聞社さんにもその作品を載せていただいたので、それからすごく変わりましたね。制作意欲が。やっぱり認められることでやりがいを感じるし、形になるのかなって思ってますね。

田平——展覧会というのはご本人ご家族にとってもすごくよい機会になるんですね。逆にちょっと刺激が強いですか、たくさんの人にいろいろ聞かれたりすることで調子を崩されたりとかそういうようなことはありますか？

谷村——それはあまりないですね。だいたいお話は私の方がしてたかなと思います。「土と色」も本当に昔からなので、京都新聞社さんとさせていただいてまして、近江学園は第1回目から出てます。第1回目が私が近江学園に就職した年か次の年か、私は現実的には第1回目はやってないんです。第2回目ぐらいからはずっと関わってたと思います。後半は事務局とかさせてもらってましたね。このスタンスも京都と滋賀と一緒にやってましたけど違いとかもあって、この副題が「ちえおくれの世界」ってついてて、この言葉に随分抵抗等もある施設とかもあったり。

田平——京都新聞社さんでも「ちえおくれ」という言葉がどうかということがあったとお聞きしました。

谷村——余談ですけど京都新聞の担当者はこれでいいって最初は言ってたんですよ。後半になってくるとやっぱりとか。昭和54年とか3、4、5年、その頃じゃないですか。その副題を付けていただいたのは新聞社だったように思います。その当時はそれで良く分かったのかなと思いましたので。無記名ですってこの展覧会はやってきたかなと思います。

田平——無記名ということであってもやはり自分の作品が展示されているという……

谷村——はい、それは自分で分かりますし。

田平——それと聞けば分かりますね。

谷村——無記名ではあったんですけど、この場所

には誰々の作品とかそれぞれの施設が名前は書いておいたたので。ただ名前を展示してほしくない保護者もたくさんいて。だから名前も、今もそうなんですけど、いるということすら隠してほしいっていう保護者がおられるので、そうするとそういう子供たちが一生懸命がんばって良い作品ができてその子たちのは飾れなくなるので、だから名前はつけない。一つだけなかったら何でって言われるので、だったら全部付けないでおこうというのが主だったと思います。だからうちの展覧会も名前はほとんどつけてないと思います。

田平——そういった配慮が美術館ではまだまだ行き届いていない部分もあると思います。

谷村——また違うのかなと思います。その作者が固定されてて出したら、その名前の表示はあってもいいのかなって思いますし、それはそれで良いんですけど、ただ「土と色」の性質からすると、名前まではなくても、がんばったら、良いのができたら展示するというスタンスで行けばいいのかなって思っていましたね。あえて名前はずっとなかったです。これも10回、8回ぐらいからみんな名前もつけようとか言う施設も出てきましたけど、とりあえず10回目までは今までのパターンで行こうとずっと押し通されたように思いますね。吉永太市先生がこれは深く関わっておられましたので。

田平——吉永先生が退職されるまで。

谷村——退職されてからも一緒になんやかんやとやりましたので。何かあると言ってこられますので、近江学園に用事がある時は私を呼び出します。私が今年退職といたら、もう辞めるのか、もっとおれ、とか言って。いやいやおれませんかって言って笑ってたけど。来づらくなるって笑いながら。そんな感じの関係です。

田平——今アール・ブリュットと銘打たれている

活動に関して思われるところはございますか。

谷村——私らがやってきたこの「土と色」と今のいわゆるアール・ブリュットは微妙に、というか大分違うのかなと。私らは作家とかそういうものを作ってる訳でも何でもありません。何より本人さんが作った作品は作ってしまえば完結してしまってますよね。人の目から見られるとかそんなこと何も気にしていない。多分アール・ブリュットで今やられてる作家さんたちも一緒なのかなとは思いますが、何か違うところでずっとそれを作っていくと、本人さん自体が充電する期間とかもないような感じの忙しさで。今までのこの「土と色」をやっててそれから今でもいろんなところからお声がけいただけてますけど、最近は、ここ何年間かは違った感じになってるかなと私は感じてて。障害を持ってる人たちがものを作ると何でも良いみたいな感じのことになってきてるのかな。それは違うと思うので、もうひとつじっくりいかないところもあります。

田平——例えば先生にとって、陶芸作品として素晴らしいと思われる子供さんの作品の基準は何かございますか。

谷村——難しいですけど38年あまりずっと携わってきたなかで、あの子のこれはすごいなって思ったのは、やっぱり何人かしかいないですね。何が良いて言われるとやっぱりいろんな対応しているんなことをしていくところかなと、その子の作品自体が。さすがに僕も自分も感心するようなものがあって良いな、欲しいなと思ったのは本当に4、5人くらいだと思います。私の感性かどうか知らないですが、私は長いことやってきてその人達のはすごいと思いましたけど、それ以外は難しいかなと思ったりするのも多々あるのかなと思います。

田平——先生の陶芸家としての審美眼と言いますかご趣味だったり。

谷村——それはそうだと思います。

田平——ちなみに特に素晴らしいと思われていました作家さんは。

谷村——村木勇に、西川と石野光輝もそうですし、あと黒沢浩三くらいかなと思います。この辺の人はすごいと思うんですよね。あとの人たちはこれは面白いとか良いなと思っても何か違うんですよね。いくつかいろんなパターンで見たときに、トータル的に何でもその人たちの面白いと、どれを作ってもらっても面白いと私は思いました。他は北村徹とかね面白いのはありますね、細長い顔をちょんちょんといっぱい、ご存知ですかね。彼は本当に最後だったんですよ、あれを作り出したのは。まだもうちょっと期間があるときっと広がったと思うんですがね。うちは児童施設なので、他の施設への移行が決まって、今は、かいぜ察っていう彦根の施設にいますけど、多分やってないので残念だなと思いますね。

田平——やはり3年間でのご制作という、とても短い期間にすごく充実した作品を作られているというのが特色でしょうか。あとは年齢的なものとか。

谷村——高校の年齢で入ってきて、一番最初の造形って何を作ると思いますか。初めて来てばっど。来年も7、8人新入生が入ってくるんですよ。一度は体験させて、初めて好きなものを作りって言った時に一年目の子は何を作ると思いますか。

田平——身近な動物とかですか。

谷村——動物だったらいいですけど違うんですよ。コップとか、昔だったら灰皿とか、器、そういうものを作る。何でかと言うと、やっぱり今までの概念というか、普通粘土で作るのは器というその辺が抜けきらない。ちょっとユニークなものを作る子も、学校にいる時に作って笑われたとか

があるんですよ。その殻を取るのにちょっとかかっちゃう。3年のうちに、どこかで認められたり、展覧会に出てみんなからすごいとかって言われると途端に変わってくる。ぐうっと伸びてくる。その中で大きくするにはどうしたらいいとか、いろんないわゆる製品を作ってるのでその比率が入ってきてかなり広がりを持っていろんなものを作るようになっていくのかなと思います。

田平——意外と言いますか思いつかなかったことで、既成概念で自由に作っていいって言われても作れないですよ、いくら子供さんといっても。

谷村——しばらくすると、ちょっとずつ試してきます。最初に花瓶の時になんかちょっと人形つけようとかかわぎと誘導したりとかそういうふうな形で、それ面白いとか言うので今度はそれで作ってくるとか広がっていくので。最初の殻というか、それを作ってもどうもないよっていうのを教えてからじゃないとなかなかそこには行かないです。

田平——自由に作るってことの難しさですよ。そこに導かれる先生方の指導方法でありますとか、技術のベースを教えられて何か生徒さんの個々の個性が出てこられた時に誘導されてというような、すごく細かく観察されてタイミングといいますか。

谷村——前にお話したかもしれないですけど、造形作品を作っているときに私らが手を入れたら残るんですね。他の施設でここここは職員の人の手が入ってるというのが分かるんです。これはやっぱりやりたくないなっていうのがあって、ここの部分だけちょっと違うとか押さえ方とか見方とか、だから作品全体でなくそういうところに目が行ってしまうのか分からないですけど、できるだけやっぱり本人さんが全部作るというふうにしたいと思うので。だから一番何が興味があるのかとか、西川君だったら何かどっか行ったらと思ったら、それを見てそれを作る。石野君だったら本

を持ってきて見たりとかしてました。

田平——石野さんはどんな本を見ていらっしやっただのですか。

谷村——動物の本が多かったです。動物の図鑑みたいな。

田平——やっぱり動物がお好きなんですね。

谷村——はい、結構見てましたね。

田平——見ながら作られたり。

谷村——こうやって一生懸命付けてるでしょ、落ちたりするじゃないですか。そしたら同じようにこうやって作ってこうしたら付くよっていうのを教えると、同じようにする。一生懸命やってる時は教えるけど遊んでる時に強制することはしないで。困っている時はそういうアドバイスをしてました。

田平——子供さんによってタイミングとかは違うと思うのですが、声を掛けるタイミングですか、やっぱり先生方の日頃の観察やご指導の賜なのでしょうか。

谷村——指導というか放ったらかしたというか、私たちは作りやすい固さの粘土を提供する。例えば手に粘り付く、柔らかいほうが良いといっても手に付いたらやりたくなくなるんですよ。だから一番やりやすい固さってどの固さっていうので粘土を提供する。固ければ割れたりするから、それはそれで面白くないのでどの固さが一番良いかというのをきちっと伝えるというのが一番大事だと思うんです。造形の時はとりわけ。他の製品もそうなんですけど、機械ろくろする時は通常より柔らかめとか、ちょっと大きいものを最初にしようと思うと微妙に固めにしておこうとか。それを用意してあげられると、どれくらいの作品をこ

の子は作ろうと思ってるなっていう時に、ちょっと最初は固めの粘土で出して土台はしっかりしてあとはちょっと柔らかいので細工しやすいようにするとか。そこはこっちで調整できる、あげる粘土を変えてやる。西川の時なんか、西川はめちゃくちゃ速いから同じ固さのように見えて同じ固さじゃない粘土を渡す。微妙に、作る速度に合わせて固さが変わってるんです。一本これは3、4kg、もうちょっとあるかな、5kgはないか。微妙に変えてやると短時間で早くできますよね。それをしないとなかなかうまくできないので潰れたりする。潰れたりすると次やる気がなくなってしまうのでそれがないように。

田平——粘土の重さとか子供の頃はよくわからなくて作って失敗しますね。

谷村——ちょっと固さを変えたら随分と違うので。あまり極端に変えると割れたりしますけど。それは大事な事かなと思っています。

田平——作られる作品を見据えられて粘土を提供するというのも大きいですね。

谷村——造形の時は大事だと思います。あんなに大きいのを作ろうと思ったら下が柔らかかったら駄目なので。貼り付けるときは付きやすいように柔らかめものにします。

田平——「土と色」のお話に戻りまして、京都・滋賀でやられていたということで、京都のスタンスと滋賀のスタンスの違いは何になりますか？

谷村——滋賀の人達は自然にできるんですよ、作品が粘土だと。だから2年に1回とやっぱり新しい作品がすうっと出てくるんですよ。2年間、うちらだと回転してますから、一麦寮さんとかでもできてるけどちょっと違うのができてくるんですよ。でもその頃は京都から出てくるのは2年前の滋賀の作品によく似たものが出てきたりするん

ですよ。だからあの頃はこれってどうなのとか思いましたけど。

田平——それは作る環境の難しさというか、京都の中で窯を構えられるのはやはり難しいのでしょうか。

谷村——作品自体が展覧会のために作っているのだと感じました。前回のがどんなんだったのかと写真を見ながら作っているのかなと思いました。同じものにはならないので違うものなんですけど、そういうのが結構あったのと、やっぱり京都の人って言葉とかに非常にこだわりがあったかなと思います。「土と色」展の副題であるとか個人の名前を出そうとかいうのはやっぱりあったと思います。吉永先生とかはそのあたりは何言ってるんだと、これで10回やると決めているんだ、というのはありましたけど。

田平——京都は京都の難しさがあり、そうすると滋賀というのは作品制作については恵まれた環境にあるということでしょうか。

谷村——そう思いますよ。粘土は信楽ですし。やっぱり陶芸といっても陶芸をできる人がたくさんいて、支援を受けることができたとかなって思います。近江学園でも一麦寮とかでもそうだと思います。八木さんとかも来ていただいてとか。東京の施設で教えてと言われた時に、粘土の額を聞いてびっくりしました。うちだと当時1kg数十円しかしなかったと思うんですけど、1kgのあの塊が2百円くらい。今は千円近くすると思いますけど。その時でやっぱりゼロが違ったなと思います。そうするとやっぱりなかなかドーンという粘土の量での作品にはならないなって思っ

田平——その一方で信楽がお近かったということではありますけれども、京都市育ちの谷村先生が滋賀に来られてというのもあって、行き来というのももちろんあってというのが面白いなというのも

ありますね。

谷村——京都の施設に窯を作りにも行きましたよ。2か所ぐらいで作りました。花ノ木医療センターっていうところと美山育成苑、今はもうそこはないですけど何か別の建物建てるかなんかで増築したのですが。その2か所は京都新聞社さんに頼まれて行きました。

田平——維持されるのも大変でしょうね。

谷村——薪とかいろいろなものとか、その時熱心な先生がおられてもあとはおられなかったら壊されてしまうので。

田平——本当に陶芸というのは、場所、材料、人と全部揃ってできることで、なかなか滋賀みたいにはいかない。

谷村——できないですね、京都でもなかなかやっぱり高いから、みんなトラックで信楽まで粘土を買いに来られてました。世界陶芸祭というのがありましたね、信楽高原鉄道が事故で途中でやめましたけど、あの時に展示をするために、うちとかびわこ学園とか一麦寮さん、あざみ寮やもみじ寮さん、落穂寮さん、これだけでやるのではなく滋賀全部でやろうってということでいろんな施設に行きました。粘土を持って行ったりして、そこでできた良い作品をここに持ってきてうちの窯でみんなで焼いて選別して、当時江谷さんという石部焼をやっている方のところにも登り窯があったのでお借りしてあっちこっちで行きながら、あのときは展示をさせてもらいました。だからいろんな参加施設を増やすっていうのがいるかなということでもさせてもらいましたね。

田平——陶芸祭というのはかなり大きなイベントだったそうですね。やはりそういった際にいろいろなきっかけがあり、石部焼があって、近江学園のある石部はそもそも焼き物の本場で、こちらで

も粘土が取れるということですよ。3年間で生徒さんが作られる作品があって、その後制作を続けられる方と別のお仕事に携わられたりとか施設を変わられたりとか、いろいろいらっしゃると思いますが、その中での陶芸での教育の意義はどういう風にお考えになられていますか。

谷村—うちの作業場に来ておられる人たちの最後の目的というのは、就業したりとかいわゆる地域で生きる、普通に暮らせるということなので、それがかなえられればそれに越したことはないと思っています。そのための素材が土であったり木であったりという考え方です。ただその中でこれが自分の趣味みたいな形で、引き続き余暇の時間でやっていきたいということであれば、それはそれでいいのかなと思います。昔、南郷に来るまでですとやっぱり陶芸のプロになったという人もいますけど、今は皆さんどちらかという就職するというのがまず目的にあるのであればそれでいいのかなと思います。

田平—教育訓練の一つの手段として、その中で土とか陶芸そのものが持っている教育的な要素の特質っていうのはありますか？ 一つのこと集中するなど、教育課程の中に特に陶芸を入れられていらっしゃる意義は何でしょうか。

谷村—例えば木というのは形が自由にならないですよ、一方土というのは自由な形になりますね。その辺りかなと思います。本当に土の感触が嫌な人もいます。そういう人たちは木をさめます、粘土がいいなって言う人は粘土をしますし、どれがいいあれがいいというよりも一長一短それぞれの素材にはあると思いますけどね。

田平—選ぶ一つの素材として土が使えるというところは大きいですね。なかなか陶芸のできる設備はないと思いますので、それができるということは貴重なのだらうと改めて思います。特に聞きしたかったことは、近江学園さんの作品をい

ろいろ拝見しておりますと、いろいろな小さなモチーフが密積して大きな形になってるという大まかな特色があるのかなと。様式といいますかそういったものが歴史的に作られてきたのかというようにところをお聞きしたかったのですが。

谷村—多分、貼り付けてるっていうのがやっぱりうちの作品の特徴みたいな感じであるのかなと思っています。でも昔はそうでもなかったかなと思います。昔は平面的なもの、線だけのものとかもあったかなと思って、今日たまたま作家の四方博子さんが来られときに見てて、昔もうちょっと作品は違ったとかちょうどしゃべってたところなんです。あの時から子供たちの作り方が変わったかなと思うんですけど。

田平—いつ頃からですか？

谷村—20年とかもうちょっと前ぐらいからかな。それまではもっと線とか、こんな人形でも人でもこんな細い線で作ってるようなものがありました。それを何かのものに貼り付けるという発想にはなってなかったなと今日改めて昔の作品を見てて思ったんです。だから最近なんでそうなったのかなと思いますけどそれはやっぱりドベとかを使うのを対応したからかな。

田平—ドベですか。

谷村—たたら板とたたら板を貼り付ける、いわゆる粘土をもうちょっと水状に溶くんです。糊みたいにして付けると剥がれない。結構いろんなものをそういえばその頃に作り始めたかなと思って。

田平—それは先生のご指導で。

谷村—はい、私のときに。通常の花瓶を作ったりする時にそういうものをやった時期だなど。それからやっぱり貼り付けるというのが増えてる

のかなと思います。もちろんそれまでもありましたけど、大量に貼り付けるようになったのはあの頃からドベを一人にひとつずつぐらい渡したように思います。それまでは瓶で置いていて必要な時だけという感じだったのが、あの頃はみんないるだろうって渡して、その頃から貼り付けるのが増えたんじゃないかなと。

田平— それぞれの方の表現したいこととうまくマッチして、作品が大型化したりして行ったりとか凄く印象的な作品が生まれていったのかなという感じになってきますね。一つのきっかけで変わるといのは面白いですね。

谷村— その時は何も思っていなかったですね。今日ふと、四方先生からやっぱりある時が変わりますねと言われたんですよ。それでよくよく見たらそうだなと思って。大体いつぐらいの作品までかなって見てたら大体20年ちょっと前ぐらいからだなあと。その頃って製品って、花瓶で、たたらを多用したんですね、粘土の板の。それで立体のものを作って。あれで結構大きなものがずっと簡単にできるということを知ったと思います。たたらを作る機械もその時に入れたんですよ。

田平— 一つの様式というか、追って行くとすごく面白いですね。

谷村— 追って行くとそうですね。この時にこの機械を入れたら、だからこういうふうに変形も変わってるのかと。製品も変わってるけど、造形も変わってるのかと。

田平— すごく大きな作品が可能なのはなぜだろうというのも考えたりしてたのですが、そういうところもあるんですね。

谷村— より土を大きくするとかより、土とたたらを組み合わせとかでものを大きくしてますよね、みんな。あるところはたたらを使っているし、

あるところはより土を使ってっていうのはありますね。「しゃちほこ」なんかそうですね。

田平— 大きな作品を作られるとやはり大きな窯も必要になりますし、登り窯も作られてみたいなことにもつながられていらっしゃるんですね。

谷村— 窯も今の穴窯のところはもう一つ縦型の窯を作ってたんです。その窯はその都度高さを変えてました。今は土をまいてますよね、土もまかずに形を変えて窯を積み替えてやりましたね。

田平— 素晴らしいですね、場所があって工夫される先生方がいらっしゃるっていう。本当にいろんな事ができるんだなと思いました。

谷村— よく考えたらいろんなことをしていますね、その頃は別に何とも思っていないですけどね。何cm積んだらいいとか言われて、積むんですとか言って積もう積もうと。煙突ちょっと上げておこうとか、焚き口ちょっと足そうとかいろいろやりましたね。

田平— 近江学園さんの小さなモチーフが大きく一つの形になってというのが、例外はもちろんありますけれども、滋賀県全体、澤田真一さんの作品とかにも一つ流れみたいなものになってるのかなと。技術的な交流や人的な交流とか。

谷村— 職員は（なかよし作業所の）池谷正晴先生とはずっと「土と色」とかでやりましたのでお互いあります。窯を作ったりとかいうのも、これはこうやったらとかいう話もあったのでそれはしてましたけど。だから落穂寮さんは元々貼り付けてありませんでしたからね、池谷先生が落穂寮におられたときは黒陶の面を作っておられたいくつかだけで、ああいうのはほとんどやっていなかったと思います。後半はやっぱり施設が展覧会をするとみんな見に行きますからね、子供も一緒

に。一緒に展覧会するとお互い見に行くので。あざみとかもうちの窯で焼いたりしてましたからね。

田平—あざみ寮さんが窯を使われてたりもあつたんですね。

谷村—やまなみ（工房）も昔はそうですよ。だから（やまなみの）山下完和さんとかも一緒にやってきましたから。彼が初めてやった頃は木を切ってきましたから。あそこは粘土はやってなくて最初の頃はよく来てくれてましたけどね。

田平—こちらの窯での交流というのがやはり盛んにされてたんですね。

谷村—一麦と一緒に展示する作品を詰め合わせたりもしてたので。東京とかも行きましたしね、昔（青山の）こどもの城で一か月間ぐらい展示したかな。

田平—こどもの城で一か月の展覧会となりますとかなり大きな……

谷村—一週間ぐらい行ってましたけどね、交代でね。あの時はマイクロバスで行ってね。トラックで行くのはあまり作品に良くないですね。また人間もやっぱり滋賀から行くとえらいばっかりで。

田平—展覧会でご一緒にとか、作品を生徒さんが見られてというお話をお聞きして、展覧会の意義、見ていただくというのはやっぱり大事なことであるのだなということを改めて思いました。他の方の作品を見られてそれを作品づくりに……

谷村—それはいい刺激になると思います。作り方とかも結構参考になるみたいです。ちょっと違うことやっているとかね。どうしても展覧会とか行くとありますね。

田平—影響や交流、そういうところで作品がまた変化していくというのがとても面白いですね。特に谷村先生独自のエピソードと言いますか、子供さんたちと関わられての思い出深いお話とかありますでしょうか。

谷村—障害とか病気とかに私は全然知識がなかったんで、初めて来た時、私一人の時に、子供がてんかんのけいれん発作を起こしたんですね。口に指を入れて、止まるのかと思ったらがぶって噛まれました。どうもなかったですけどね。その子が戻ってから「痛かったなあ。俺が悪いんだけどな」と言ったら、それからすごく言うこと聞いてくれるようになったんですよ。来てまだ4、5日で他の職員がいなくて分からなかったというのがあって、全くそういうことは勉強してなかったんで。

田平—福祉的な観点は研修とか実地で学ばれていったという感じなんですか。

谷村—そうですね、ここに来てからですね、ほとんどは。

田平—今は皆さん福祉からの方が多いのでしょうか。

谷村—はい職員はみんなそうですね。

田平—教育のお立場から福祉の方を見られたりすると違いはあったりするのでしょうか。

谷村—コスト意識みたいなものは違いますね。まとめ方が違うんですね、福祉の方にひとつ書いてもらってもね、何かこうやっぱり非常に熱く書いてくれるので。簡単に書いてよとか言って、見て分かりやすくとか、ぱっと見て分かるようにとかね、ちょっとやっぱり違うのかなと思いますね。

田平—近江学園の50年誌で谷村先生の文章を

読ませていただいてたんですけど、やっぱり谷村先生のお書きになる文章はソリッドで造形に着目されて書かれていますね。

谷村—その頃にどんなのを書いたのか覚えてないですけど……

田平—窯のお話ですとか。

谷村—50年はめちゃくちゃでしたからね。50年のときに自分たちで本とかも作ってて（『丘に咲いてきた花—近江学園作品展』1996年）。

田平—こちら素晴らしいですよ、すごく解説も詳細で、写真も素晴らしいですね。

谷村—写真もリバーサル使ってないんですよ、普通のフィルムで。だから印刷屋さんにあんたこんなんとか言われました。いやもうええからそれで何とかやって。その頃から本格的にやりかけた時ぐらいですかね展示とか。そこまではこの場ではあんまりやってなかったですね。

田平—村木勇さんの作品の表紙がすごく素敵だなと思いました。

谷村—村木が好きだったんでねカタツムリが。その時はカタツムリにしたんです。『つむぐ』（『つむぐ 近江学園作品集』2013年）の時は（石野光輝の作品の）キリン（の山）だったんですけど。

田平—村木さんはカタツムリがお好きだったんですか。

谷村—カタツムリをよく作ってましたね。あといろんな人を並べて作って。人とかいろんなものをずっと延々作ってましたね。結構彼も自閉さんでしたけど面白いものを作りましたね。

田平—カタツムリのリズミカルな様子がすごく

好きです。近くにカタツムリがよくいるんですか。

谷村—もう普通にいます。

田平—美術館の周りにもいます。やっぱり自然に囲まれてるなという感じですね。すごく素晴らしい本で。

谷村—でも間違えて作品展にしたんです。作品集にしとけば良かったと。

田平—展覧会もされたんですよ。

谷村—展覧会もしました。東京とか。（滋賀県立近代）美術館もお借りして、ギャラリーで。

田平—1996年なんですよ。

谷村—はい、抽選に行きました。

田平—ギャラリーは秋は混む時期で。

谷村—そうなんです、混む時期でしたけど。もういっぱい作品を持っていきましたよ。そのときは東京とかも行きました。

田平—そうですね、全国を巡回されて。いろいろと子供さんたちと関わられて慣れないところでも馴染まれていって、最初先生を目指されていて福祉の現場に来られてすごく違ったというお気持ちもあって。けれどもやはりそこで続けられたっていうところは、何かきっかけですとかそういったものがあるのでしょうか。

谷村—結局面白かったのでしょうかね。興味があったのかな、全く知らない世界だし、非常に興味があったのかなど。やめようとも思わなかったし。最初からずっとのめり込んでたのだと思います。いろんなことをやったんじゃないかな、それを上が認めてくれてたのがね、それでいいよっていう

感じでやらしてくれたのかなって思いますけど。

田平——上と言いますと、吉永先生ですか。

谷村——いえ、こっちの近江学園の上司ですね。あとの外との繋がりや、吉永先生とか通じて「土と色」とかということ。どこ行っても福祉の現場だったら知ってる職員が一人二人いるんですよ。こんな事業所知らないと言っても「先生」とか言われて、ああその時あそこにいたのかとか言ってね。非常にありがたい。だから「土と色」とか世界陶芸祭をやったときに非常に人脈を作ったのかなって思います。

田平——自由さという意味では今とも違いはありますか？

谷村——今と何が違うのかはよくわからないっていうのが一番かなって思いますね。ここだけが自由だったのか全体が自由だったのかというのは分からないけど、今はやはりどの世界も一緒だけど、ちょっとした余裕、不必要な部分があったのかなと思います。そこが認められるというかそれが普通にあって、今はそういった部分がやっぱりどんどん削られて、がちがちになってるかなっていうのは思いますね。それがだいぶ違うのだと思います。息抜きができない。してますけどね。昔はもうちょっと出張でも自由がありましたから。この前なんか2泊3日と言われて5か所施設回ってきたんですよ。平塚行って次福島行ってその次郡山行ってそれから東京の東村山行って最後は渋谷で終わって帰ってきて。朝は8時ぐらいに出てホテル着くの21時半とかで2泊3日で行きましたけど。

田平——渋谷の公園通りギャラリーをご覧になられたんですか。

谷村——いえ、施設の見学に行ったんです。ここ改築なんですよ、建て替えて。それでいろんな建

て替えられた施設を見てきたんです。

田平——改築に関しまして谷村先生のご希望やご意見はどういったものでしょうか？

谷村——せっかくだから温かい感じの施設がいいですね。家庭的な。ほとんど家庭を知らないで入ってくる子供が18歳までここにいますよね。コンクリートの施設という感じではなく家みたいな感じの小規模のユニットでという希望をして、基本計画はそれで行こうとなっており、ありがたいなと思ってます。

田平——平屋ですか？

谷村——平屋でというふうに思ってますけど、滋賀県にビルで立てたほうが安くつくと言われて、いやいや人が暮らすとこだろうと。まず障害福祉課に理解してもらうのに時間かかりましたけど。財政が言うならまだしも、障害福祉課が言うするんだと。

田平——改築も本当に楽しみです。

谷村——作業場も全部建て替えます。外も、ギャラリーの部分も建て替わるみたいなので。無理して作っておいたから次の予算でもついているのはありがたいなってその辺は思ってるんですよ。

田平——美術館に作品をたくさん管理換をいただきまして、また近いうちにミシガン州のフレデリック・マイヤー庭園美術館でも展示させていただきますが（『過程と存在—障害のある人による彫刻の現在』展、2018～2019年）、そういった美術館などの展覧会で展示されるということについて率直なご意見いただければと思います。

谷村——展示していただけることは非常にありがたいと思っています。それぞれのところでそれぞれの良いところを見て展示していただけるんです

から、大事にしていだけるのが一番良いと思っていますので、何かぜひやっていただいた時には園生を連れて見に行ければと思っています。

田平— やっぱり見に来ていただくというのがとても大事だということが、今回お話をお聞きしましてわかりました。

谷村— 子供らは見ることで随分変わるので、いろんなところに連れていこう、いろんな事をしようと言ってるので、ありがたいです。

田平— ぜひ来ていただきやすいような美術館にしたいと思います。

谷村— 石野君とはスイスに行きましたよ。ローザンヌに。

田平— いかがでしたかローザンヌは。

谷村— アール・ブリュット・ミュージアム凄いですね。あれだけ広くて、外から見ると全然あれですけどね、あの中の広さは。

田平— 今後近江学園ではずっと造形活動をしていかれると思うんですけども、今後期待されることとか受け継がれたいこととかございますか？

谷村— 県立なので結構いろんなことがありますけど、子供らは関係ないので子供達がやっぱり一番やりたいこと、作りたいものを作らせるような環境を、それだけしてもらったら良いのではないかな。別に目立たなくても良いので、細々でも続けられれば良いって思ってたので、それで認めていただいたら。今はちょっと盛り上がりすぎだと思うので。こんなのがいつまでも続くことはないと思いますが、それはそれで良い部分もあるので、そのあたりは続けてもらえたらなと思っています。

田平— 環境を守られるということを守り続けていかれるということでしょうか。

谷村— そうですね、それで良いのかなと思っていますけどね。

田平— どうもありがとうございました。



谷村太氏 1986年の近江学園窯業科にて 創立40周年記念制作の陶板を手に



1990年代の窯業科（右奥に谷村氏）



2018年3月9日 谷村氏 近江学園にて